

和光市立白子小学校

令和6年度 学校経営計画

1 学校教育目標

歴史を引き継ぎ 未来を拓く

令和6年度は白子小学校創立150周年の年となります。地域と共に歩んだ白子小の歴史に想いを馳せると、非常に感慨深いものがあります。同時に、子ども達が予測困難な時代を生きていくための力を育むという、学校に託された使命もございいます。そうした思いから、昨年度、学校教育目標を「歴史を引き継ぎ 未来を拓く」と致しました。令和6年度は、その第2段階となります。

2 重点目標

(1) 「白子学」

昨年度からスタートした「白子学」の推進を加速させます。「白子学」は、地域の人的・物的リソースの活用、子ども達が予測困難な時代を生きていくために必要な資質・能力の育成等を目標とし、**白子小独自の学び**を推進することをねらいとしています。一例として、昨年度は「ささら獅子舞に関する体験的な学び」「食育・ダシについて学ぶ授業」「理科学研究所見学」「クラブ活動における外部人材活用」等を実施しました。本年度は、さらに「清水かつら・大石まことに関する授業」「腸内環境についての学び」「紫外線についての学び」「外部人材を活用したプログラミング教育」「模擬裁判体験」「中学生と小学生の学習交流（夏季休業中）」等を実施していきたいと思ひます。

白子学

- 白子小・白子宿の歴史と伝統を学ぶ授業
- 外部人材を活用した授業
- ICTを有効に活用した授業
- 主体的・対話的で深い学びを推進する授業
- SDGs・プログラミング・経済教育等、21世紀を生きるための授業

(2) ICTの活用・新しい学びの推進

和光市において児童生徒用タブレットが一人一台配置されて4年目となります。コロナ禍を受け、緊急的な配置だったこともあり、「とにかく使ってみよう」「まずは慣れよう」というところからのスタートでした。しかし、もうその段階は過ぎています。ICT活用の良さは何か、ICTを使って子ども達は何を学ぶのかを明確にした上で、効果的な運用をしていく必要があります。

ICTは何のための道具か（一例）

- 子供たちの「主体的・対話的で深い学び」を推進するための道具
- 子供たちが主体的に「自走」するための道具
- アナログ環境では体験できないことを体験するための道具
- 「場を越える」道具・・・遠隔授業・バーチャル体験・仮想体験
- 「時間を越える」道具・・・反転学習・家庭学習との連動

そして、ICT活用に限らず、教育の目標は子供たちの「**主体性**を伸ばすこと」「**協働性**を高めること」「**コミュニケーション力**を高めること」「**発信力**を高めること」そして「より**深い学び**を推進すること」等に 있습니다。敢えて「大昔」という言葉をつけますが「大昔」の「知識を教えるだけの学び」からは脱却しましょう。これは教職員だけでなく、保護者の皆様も意識の変容が必要です。子供たちの発達段階は個々で異なります。**点数化されたものを他者と比較すること**にあまり意味は**ありません**。むしろ、その子が「主体的に学ぼうとしているか」「対話・協働できているか」「発信できる力があるか」の方が大切です。

こうした視点から、白子小の「ICT活用」「新しい学びの推進」を進めて参ります。

(大人が)「教える」から、(子供が)「学ぶ」へ

「知識重視」から「スキル重視」へ

子供を「誘導」するのではなく、子供が「自走」する学びへ

「教師（親）との対話」から「あらゆる人・モノとの対話」へ

(3) 「ほうれんそうのおひたし」

着任以来、繰り返しお伝えしていますが、保護者・地域連携、教職員間の連携の基礎としての「ほうれんそう（報告・連絡・相談）」の浸透、そして児童への指導・支援の在り方の基礎としての「おひたし（怒らない・否定しない・助ける・指示する）」の意識をより深く浸透させたいと思います。これは教職員だけでなく、保護者の方にも是非共有していただきたい意識となります。よろしく願いいたします。

- **ホウ「報告」**

教職員間・管理職への報告・保護者への報告。→must 事項。多くの事件事故が一人で処理することで発生する。保護者・地域の皆様も気になったことは是非、学校にご報告を。特に「いじめ対応」「生徒指導対応」は、些細なことでも「ほうれんそう」で。

- **レン「連絡」**

教職員間の連絡事項の確実な周知徹底・保護者・児童への正確な連絡。→must 事項。学年間での共通認識を持つ。・・・だろう。・・・に違いないは×。

- **ソウ「相談」**

一人で抱え込まない。年齢差・経験差・役職の違いを気にしない。学校での児童の様子を保護者と共有し、共に育てる意識。→ 職場の雰囲気重要。風通しの良い・明るい職場。保護者目線に立ち、「共育」する意識。保護者・地域の皆様も、是非、学校を信頼いただき、何事もお相談ください。

- **お「怒らない」**

アンガーマネジメント。「怒らない」≠「指導しない」。必要なことは確実に「指導」を。ただし、その指導の在り方において「感情的に怒る」ことはしない。「怒る」のなら、効果的な「演技」であるべき。実態に応じた多くの「指導の引き出し」を持つ。ご家庭においても、感情的ではない「諭し方」を。

- **ひ「否定しない」**

児童の持つ「良さ」に着目する。児童が自己肯定感を持つことが成長の鍵。自己否定をもたらす指導は、逆効果であることが多々ある。ありのままの児童を承認し帰属意識を持たせる。家庭においても、お子様の自己有用感を育てられる「褒め方」を。

- **た「助ける」**

児童が何に困っているのか、どこに躓いているのかをよく観察し支援。支援のあり方については、ユニバーサルデザインの視点・個別支援・特別支援の考え方を取り入れる。ご家庭においては「無償の愛情」を。ただし「物」を与えることは愛情の代償にならないケースが多々あります。言葉と行動で愛情を示してあげてください。

- **し「指示する」**

指示は「明確・簡潔」に。指導すべき事はしっかりと。特に児童の安全や生活規律に関することは、「凡事徹底」し、学校・家庭・地域で繰り返し、指導する必要があります。

3 その他の重要な視点

重点目標以外にも、全国的な教育問題として、以下の点についても対策を考え、解決を目指していきます。

(1) 不登校の解消

いじめや人間関係ではない理由での不登校の増加・・・無気力、学校に行かせる意義を保護者が感じていない、コロナ禍の影響、引きこもり傾向等。

学校単独で解決することの困難さ・・・民生児童委員、地区社協、行政あるいは民間施設等と連携して、状況の改善を目指す。

(2) 体力の向上

子供たちの心と体は密接に関係しており、体力の低下は、不登校等や問題行動の原因の一つになっているのではないかと、根本的な持久力（心の持久力も含めて）が子ども達に必要なではないかという視点から、（健康）体力の向上に向け、対策を講じていきます。

(3) 規範意識の醸成

「あいさつ」「清掃」「礼節」・・・これらは、非常に日本的な価値観であるとも言えます。これらの「規範意識」の高さは日本人の良さの一つです。子どもたちがこうした価値観に誇りを持ち、自分たちに自信を持てる子に育てていきたいと考えています。